



第 158 号

二〇一九年一月二日発行
発行者 奈良県立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畷傍町一番地
編集者 鈴木裕明

所長就任のごあいさつ

青柳 正規

私は、考古学の中でもギリシャ・ローマの美術を中心とした古典考古学、クラシカル・アーケオロジーという分野を五〇年近く研究してきました。現在も、東京大学の調査として、ナポリの東約二〇kmに位置し、ベスビオス火山のポンペイとは反対にあたる北山麓において、発掘調査を二〇〇二年から続けています。今回、幸運なめぐりあわせで橿原考古学研究所に来ることができ、非常に感激しています。橿原研は日本で最も古い考古学研究所であり、この地で考古学の業績を積み重ねてこられました。その伝統をもっともつと大きくしていただくように、所員の皆さんには努力していただきたいと思っています。私は及ばずながらその手助けをしていきたいと思っています。現在、日本は非常に大きな曲がり

角にあります。一九四五年に戦争が終わったときに人口約七千三百万人だったのが、一九八〇年を過ぎて一億二千万人を超え、人口増をうまく生かしながら経済等に勢いがあります。それに対して、今は逆の方向、つまりすべてが縮みの方向という初めての経験の中にあります。組織やシステムに齟齬が生じています。膨張の時代ではなく、縮小の時代に向く対応していく組織とシステムが必要とされています。あらゆることに対応していくために、しばらくは社会的な齟齬がつづくと思います。そういう中で一番大事なのは、自分たちが住んでいる地域、あるいは日本列島の歴史や文化を我々や一般の方々がどのように認識するかということだと思います。これが、厳しい時代を生きていく上で大変重要なことだと

次 所長就任のごあいさつ
古墳時代前期の鉄器製作と砥石についての覚書き
——纏向遺跡出土の大型砥石——
中国陝西省における研修
研究所・附属博物館関連展示案内
目 海外交流

青柳 正規 1
水野 敏典 2
川上 洋一 2
米川 裕治 4
編 集 部 8
編 集 部 8
編 集 部 8

思っています。奈良は国家形成がなされたところです。国づくりや社会をどうしていくのかといったときに、一歩振り返り、奈良で一三〇〇年前、一四〇〇年前に行われたことを参考にすることが、最も重要ではないかと考えます。私は法隆寺に行くと、そのたまたまの端正さから国づくりの意気込み、新しい社会をつくるんだという清々しさをいつも感じます。そういう清々しさをいつも感じます。そうした意気込み、清々しさは、今の日本にはなくなってしまう。大都市圏では様々なところで再開発が行われていますが、国づくりや新しい社会を作るんだという理念は全く感じられません。経済原理だけでいろいろなことが行われています。そういうときに奈良は原点として、かつて日本はこういう理念で社会をつくらうとしていたんだ、ということ発信できます。あるいは理念を学ぶことが出来る場でもあります。橿原研が調査研究対象としている地域

は大変重要な場所だと言えます。橿原研の所員は、日本の国づくりの歴史を具体的かつ詳細に、つまびらかにしていくのだということを肝に銘じて、日本で最も歴史と伝統のある考古学研究所ということに誇りをもって、仕事をしてもらいたいと思います。そのためには、リサーチアクティヴでなければなりません。その尺度の一つとして、是非科研費などの競争的資金を取るよう努力していただきたいと思えます。また、調査研究の成果をなるべく多くの方々の良い形で伝えることに励んでいただきたいと思えます。市民の方々の支援を得て、より良い調査研究を行っていくという、良い社会循環をつくるようお願いします。私自身、今まで発掘調査などで科研費をいただけてきました。日本の人文系の研究の中では最も多く、世界の中でも人文社会学者としてはトップクラスだと思いますが、それ

は資金がないとやっていけない分野の研究を進めようとした結果であります。所員の皆さんもリサーチアクティブであり続けるために、一つの指標としてぜひ科研費を獲得していただきたいと思えます。

さらに現在、インターネットを上手に活用することが重要です。例えば起業家ではより大きくなれるか、より小さなままなのかの分かれ目が、インターネットを活用するか否かにかかっています。

これからグローバル化する中で、自分たちの住んでいるところの歴史文化を一人ひとりがきちんと把握しているかどうかということが、国の支えになると思えます。所員一人ひとりの研究成果を社会に、世界に、積極的に発信していただきたいと思えます。発信することが、いつまでも清新な日本社会が続くことへの貢献になると思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

(二〇一九年八月五日所長訓示より)



古墳時代前期の鉄器製作と砥石について の覚書き — 纏向遺跡出土の大型砥石 —

水野 敏典・川上 洋一

一、はじめに

古墳時代前期の日本列島内における鉄器の大量保有は、古墳への鉄器副葬により知ることができ。しかし、出土量に比べて鉄器製作や保有の実態には不明な部分が多い。

近年、福岡県博多遺跡で古墳時代前期前半の鍛冶関連遺物が大量に出土し、鉄器製作の大きな拠点であることが判明しつつある¹⁾。当時の政治的中枢が所在したと目される奈良県纏向遺跡では、博多遺跡と同様の断面カマボコ形の特異なフイゴ羽口が出土しており、鍛冶技術の共通性が指摘されるものの鉄器製作の評価は定まっていない²⁾。その中で纏向遺跡一一七次調査³⁾における大型砥石の出土は注目に値する。今回は、その大型砥石について補足報告を行い、鉄器の製作と保有の新しい視点としての砥石の意義を確認したい。(水野)

二、纏向遺跡一一七次調査と大型砥石

調査は桜井市芝の国道一六九号線バイパス建設に伴い実施した。調査

常の展開図では表現が難しいと考え、実験的な試みとして三次元形状計測を行った(図2)。

この砥石の特徴はその大きさにあるが、何を研いだものであるか。広義の砥石の研ぐ対象は鉄や青銅などの金属器に限らず、玉の石材など多様で、用途も形を整える荒砥から仕上げ砥までの工程毎に、多様な形と材質が想定される。今後、砥石を集成して形態的な特徴を整理した上で再検討が必要であるが、現時点では、研ぎ面が比較的平滑で、稜線が明瞭な砥石に鉄製利器の刃部研ぎ出しの可能性を想定している。

同じ調査の出土鉄器には圭頭式鉄鎌がある(図1)。全長5cm前後で、脇本遺跡でも出土しており、同時期の奈良盆地集落に通有な型式といえる。鉄鎌の刃部長が一辺約2cmに対して、大型砥石の研ぎ面は20cm以上と長く、幅も最大6cmと広いことから、鉄鎌よりもはるかに大きな金属製品の存在を想定させる。大型砥石の出土例は博多遺跡五〇次調査にある⁶⁾。全長50・4cmと本例より一回り大きく、同様に多角柱で稜線が明瞭で平滑な研ぎ面をもち、尚かつ鍛造剥片と共伴した。大型砥石は類例の少なから汎用品ではなく、必

三、大型砥石とその出土意義

(川上)

大型砥石は、全長三三・四cm、最大幅一四・四cm、最大高一二・六cm、重量八・二kgの耳成山産の流紋岩である(図2)。多面の柱状で明確な稜線を持ち、上面と左側面に強い擦痕のある滑らかな面をもつ(写真1)。同時に、他の面にはノミ状の工具痕があり、砥石として未使用な面を多く残す。形が多角柱であり、通

(3)

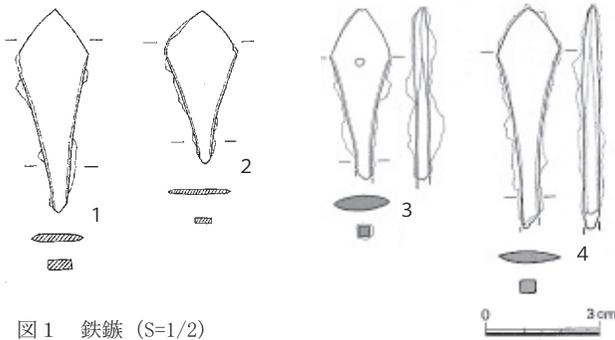


図1 鉄鏃 (S=1/2)

纏向遺跡 117次調査出土：1・2

脇本遺跡 13次調査出土：3・4



写真1 大型砥石擦痕

左小口



右小口



上面



下面



図2 纏向遺跡117次調査出土砥石三次元形状計測 (S=1/4)

0 10 20 30 40 50mm

要に迫られたものであり、大型利器の存在を示唆すると考える。大型砥石からも博多遺跡と纏向遺跡の鍛冶の性格の共通性が指摘できる。

四、大型砥石の示すもの

鍛冶関連遺物であるフイゴ羽口や鉄滓、切断鉄片、鍛造剥片、金床石は、鍛冶遺構の存在や操業規模、鍛冶技術について教えてくれるが、製作対象の情報を得るのは難しい。未成品を除けば、砥石は製作対象の情報を得られる可能性をもつ数少ない資料であり、その点を再評価したい。ただし、砥石は金属器製作に不可欠であるが、利器では研ぎ直し等の維持管理にも使用の機会があり、製作時に限定できない。つまり利器への利用が想定される砥石は、鍛冶関連遺物と共伴すれば鍛冶製作対象の情報、単独の出土では研ぐ対象の情報を示す可能性をもつ。

筆者は、直刀出現を画期とした古墳時代前期での刀剣類製作開始の可能性を検討しており、実物が出土しなくとも大型利器の存在を示唆する大型砥石の意義は大きい。また、砥石を対象とした蛍光X線分析は、銅鏡、銅鏃等の青銅器製作の痕跡確認にも有効と考える。今後は、砥石に注目して、鉄器、青銅器の製作を捉

え直していきたい。(水野)

JSPS科研費一七H〇二四二三の成果の一部であり、石材鑑定は奥田尚氏に御教授頂いた。

註

- (1) 大塚紀宣二〇〇六『博多一〇六』福岡市埋蔵文化財調査報告書第八九二集ほか
- (2) 青木香津江一九九八「纏向遺跡第一〇二次(勝山古墳第一次)発掘調査概報」奈良県遺跡調査概報一九九七年度第二分冊
- (3) 川上洋一二〇〇〇「纏向遺跡(第一七次調査)発掘調査概要報告」『奈良県遺跡調査概報一九九九年度第三分冊』
- (4) 豊岡卓之一九九九「纏向」土器資料の基礎的研究『纏向第五版補遺編』
- (5) 光石鳴巳他二〇一一『脇本遺跡I』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第一〇九冊
- (6) 大庭康時一九九二『博多二二』福岡市埋蔵文化財調査報告書第一〇九冊
- (7) 村上恭通二〇一八「博多遺跡群の鉄器生産」第六回AIC東アジア鉄器研究ワークショップにて実見
- (7) 水野敏典二〇一八「黒塚古墳出土武器をめぐる諸問題」『黒塚古墳の研究』八木書店

中国陝西省における研修

米川裕治

一、はじめに

私は奈良県戦略的専門分野交流事業の派遣職員として、中国陝西省西安市での研修を経験しました。派遣期間は平成二九年一月七日から翌三〇年三月一六日までの百日間です。この事業は県が友好提携を締結している陝西省との技術交流や人脈構築をはじめ、実質的な成果が得られるよう、文化財保護などの専門分野の人材を陝西省に戦略的に派遣するものです。実施要綱が定められており、現地での活動内容として専門的知識と現地言語の習得が求められています。専門的知識の習得については「古代日本と中国における都城および寺院の比較研究」というテーマで、都城・寺院の踏査、関連文献の収集、研究会への参加、口頭発表などを行いました。踏査は二〇箇所以上、研究会参加は四件です。ここでは陝西省に滞在した期間中の出来事の一部を記したいと思います。

なお私は平成一七年にも中国での研修を経験しておりますが、この時は由良大和古代文化研究協会の助成

によって河南省二里头遺跡の発掘調査へ参加させていただきました。今回は一二年ぶり二度目の在外研修となります。初回とは違って不安はありませんでしたが、私にとって陝西省はほとんど未知の世界です。新鮮な気持ちは一二年前と変わらず、期待を胸に関西国際空港をひとり飛び立ちました。

二、研修の日々

西安に到着して二日後の一二月九日に、西北大学文化遺産学院(以下西北大)の冉万里先生のご自宅を訪問しました。西北大は陝西省が管轄する中国屈指の大学で、今回の研修の生活拠点となる機関です。冉先生は長年にわたって橿原考古学研究所(以下橿考研)の研修員受け入れを担当されています。この日は、研修全般について相談をして、助言を頂きました。まず大学のキャンパス周辺と西安市に慣れて、それから徐々に行動範囲を広げるのがよいということと、語学は時間もないので自学自習がよいのではないかとご提案を頂きました。先生には生活や語学学

習などの面で研修期間を通して、なにかと気にかけて頂きました。また研修期間の初めは、各方面へ挨拶に出かけ、生活基盤の確立などに全力を注ぎましたが、慣れないことばかりでしたから、要所で西北大修士課程学生の陳璐さんに助けて頂きました。

冉先生宅訪問三日後の一月二二日、陝西省考古研究院（以下省考古院）で、孫周勇院長、王小蒙副院長に初めてご挨拶しました。省考古院には、遺跡見学など考古学の専門研修についてお世話になりました。ここでも私の研修計画について具体的な指導をして頂きました。研究の拠点として図書閲覧室を利用して頂くことになったのですが、担当の程蕊萍さんには図書にかかわることだけでなく見学旅行のことなど様々な面でご配慮頂きました。北部に見学に行くことが決まったことを伝えると、陝西省での生活にまだ慣れていない私に対して、気候の違いや必要な服装までレクチャーくださるなど細やかな気配りをしていただき、大変心強く思いました。

王小蒙さんは、檀考研の職掌分担になぞらえた場合、調査部と資料課を合わせた部門の副院長で、陝西省

だけでなく世界各地で行われている省考古院の発掘調査を指揮監督されたり、所蔵文物の収蔵管理を担当されたりしています。本来の職掌と関係ない我々日本人の世話をして下さいのは、彼女の日本留学時代の恩返しだそうです。執務室でひっきりなしの電話に対応し、案件ごとにすぐ部下を呼び、適切に指示を出されま

す。私は省考古院からバスで一時間ほどの所にある浄土宗の名刹香積寺に行きたいと思っていました。一月のある日の午前、王副院長に日程の相談に行きました。「いつ行ったらいいでしょうか？」と尋ねると、彼女は「今でしょ。今すぐ出発しなさい」と。私は想定外の返答に面食らってしまいました。「せめてお昼ご飯だけでも食べさせて下さい」と言ったら、昼食後に出発しました。果たして香積寺に到着すると、昼過ぎから降り始めた雪で周辺一帯は銀世界です。なんとか境内を踏査し、塔も拝んで、無事帰路につくことが出来ました。その後、雪は降り止まず、「爆雪」に見舞われた西安の交通機関は麻痺することになります。間一髪で宿舎に帰着出来たのも王副院長の慧眼によるものでした。また省考古院の多

くの研究員の方々にもお世話頂き、恩恵を受けましたが、それらは彼女による適材適所の差配があつてのことでした。

陝西省内の見学旅行で特に印象に残るものを記したいと思います。二月二〇日から二泊三日で陝西省北部を旅行しました。この際に万里長城鎮北台、紅石峽谷石窟、榆林古城、石峁遺跡、白雲山廟、統万城などの踏査、見学をしました。白雲山廟からの眺望は雄大で、黄河の背後に黄色い大地が広がっていました。遙々来た甲斐があります。三日間、邱楠さん（省考古院）と朱明月さん（榆林市文物保護研究所、当時）にご同



写真1 雪景色の西北大学太白校区

行頂きました。帰路は榆林から夜行列車に揺られ、一人で西安に戻りました。二人は心配なのか出発際の列車のコンパートメントまで来てくれた。保護者に見送られるみたいで気恥ずかしかったです。嬉しかったです。

この旅行では陝北名物の抿節（ミンジエ）に出会いました。そば粉や小麦粉を原材料とし、トコロテンのように押し出してつくる麺で、さまざまな薬味を好みで加えて混ぜて食べるのですが、やさしい味が心が安らぎました。西安市内にも何店舗か抿節専門店がありますが、なぜか私のお気に入りのところは閉店となっ



写真2 白雲山廟から黄河を望む

てしまいました。残念です。

一二月二七日から一泊二日で旅行した渭南市劉家窪遺跡の参観も思い出深いものです。劉家窪遺跡は金属器や玉器の副葬が豊富な春秋時代前半期の墓ですが、盗掘者が逮捕されたことで周知され、学術的な調査が行われた話題の遺跡です。到着したときには現場作業が終了してしました。埋め戻された調査区を前に、考古隊の孫戦偉さんが詳細な説明を下さいました。北京大学博士課程学生の張吉さんは、出土した青銅器の科学分析試料を採取するために来訪されたのですが、この旅ではすべて同行することになりました。彼の作業が半日もかかったので、幸運に



写真3 陝北名物振節(邱楠氏と)

も私は長く考古隊に滞在することになりました。鼎などの青銅礼器は、土とともに取り上げられているのですが、考古隊の技術工人が室内で丁寧に土を取り除き、「完掘」します。夕食をはさんで、外が真っ暗になるまでこの整理作業は続きました。その間、脇でつぶさに見学することができ、贅沢な時間を味わいました。

昭陵、乾陵方面の見学は唐陵に詳しい田有前さん(省考古院)にご案内頂きました。乾陵は周囲の東西南北にある門闕すべてを含めて踏査することができました。彼には前日、周原遺跡を案内してもらっていて、丸二日も申し訳ないと、これは自分にとって勉強になる踏査だから」という言葉が返ってきました。社交辞令ではありません。

彼に限らず中国の研究者の皆さんは、私の引率の為であったも、いつも新鮮な面持ちで遺跡や文物に臨まれます。博物館では研究者でない

展示解説員がいて解説してくれることが多いですが、それも真剣に聴いて、質問したり議論したり…。どの方も謙虚な姿勢で、感心しました。

これらの旅行以外にも、時間のあふ限り、都城や寺院関連遺跡の踏査と博物館の見学を行いました。一人行動が多かったですが、中国の友人に助けて頂くこともありました。中でも西安市南郊の終南山一帯の寺院群は、中国社会科学院考古研究所(以下社科院)の郭曉濤さんのおかげで効率的に踏査できました。

二月初旬に私は少し体調を崩し、一週間たっても熱が下がらなかつたので、ついに病院に行くことになりました。多くの方が心配して下さったのですが、当日は郭曉濤さんが病院に連れて行ってくれました。陝西省屈指の大病院は、多くの患者でごったがえしていました。

いつになったら診察してもらえるのか不安になりましたが、動線は大変システマティックに管理されており、二時間ほどですべてが終了しました。診察や検査など項目ごとに料金を支払う点が日本の病院と違うところです。薬をもらって

安心したところで、郭曉濤さんにありがとうと言うと、彼は「自分も糧考研で研修して体調が悪い時に橋本裕行さんに病院に連れて行ってもらった。今も感謝している」と。黒くて甘い飲み薬ではありませんが、ちびりちびりと飲むたびに、先輩方が積み上げてきたことの大きさを感ずりました。

熱が下がってもなかなか体力と集中力が回復しなかつたので、しばらくの間、近場だけしか見学ができませんでした。その代わりに分野や時代は限定しないことになりました。その時期に大明宮の南にある西安中国書法芸術博物館を訪れました。展示はほとんどが中国の書法の歴史にかんするものですが、奥に、封泥の実物が大量に常設展示されている部



写真4 終南山麓の踏査(後方は二龍塔)

屋がありました。思わぬ掘り出し物です。他にも近現代史専門の博物館を数カ所見学し、貴重な学習期間となりました。

三月上旬には寧夏回族自治区と河南省への調査旅行に参りましたが、寧夏文物考古研究所と社科院の皆様のご厚意により多くの収穫を得ることができました。寧夏では、羅豊所長のご配慮で、所員や関係者の皆様も新しい馬曉玲さんには、西夏時代と伝えられる拜寺口双塔など、賀蘭山麓のさまざまな遺跡を踏査し、まる一日かけてその魅力を紹介して頂きました。嘉慶二五年（一八二〇）



写真5 水洞溝遺跡で解説をする郭家龍氏

再建の承天寺は研究所すぐ東隣りに聳える樓閣式の磚塔で、一一層、六四・五mあります。内部の階段を上げて登ったのですが、途中から脚がパンパンになりました。なんだかっこ悪いので、なにくわぬ顔をして下まで降りたのですが、馬さんには「脚にきたでしょ」と見破られてしまいました。脚にはさらに乳酸がたまりました。どっと疲れたのを覚えていいます。現在、樞考研で研修されている郭家龍さんには、銀川市内の古い建造物や水洞溝遺跡をご案内頂きました。水洞溝遺跡は世界的に有名な旧石器時代の遺跡ですが、現在は観光地区でもあります。春は名

みの肌寒い気候の中、多くの観光客が楽しそうに旧石器の遺跡を見学していました。初期の学術調査の様子がわかるようなジオラマ展示や、トレンチまでシャトル運行の駱駝車など、エンターテイメントの要素もふんだんに盛り込まれています。全てを見るには一日かかるという郭家龍さんの説明にも納得しました。日本にはないタイプの遺跡活用です。

河南省では、主に洛陽付近の都城の踏査をしましたが、漢魏洛陽城考古隊長の銭国祥さんをはじめとする社科院の方々のご援助がありました。

特に二里头遺跡では隊長の許宏さんが、予定を変更して北京から駆けつけて下さって大変恐縮しました。余談ですが、中国の考古隊にはそれぞれ専属の調理人がいて、考古隊によって風味が違うそうです。なんでも考古隊長の食に対するこだわりが現れるのだとか。省考古院の王占奎さんと一緒に周原隊の麵も格別

でしたが、私にとって二里头考古隊の味は懐かしい味です。このことを言ったわけではありませんが、二里头見学之夜は考古隊の食堂で歓迎して下さいました。許宏さん曰く「外のレストランでも歓迎出来ませんが、米川さんにとってここが最高でしょ」。二里头や近隣の社科院考古隊の方々が宴会に参加され、一二年前と同じ王艶鵬さんの手料理の並ぶ円卓を囲みました。韓建華さん、郭曉濤さん、陳国梁さん、劉濤さん、曹慧奇さんは樞考研研修組。他所で食事している感じがしません。今回は現地で頂いた親切の一つ一つに対して歴史と重みを感じました。一二年前とは違う感触です。もう若くはない身での在外研修ですから、実のところ出発前は、少し罪悪感を抱いていました。でも、こんなことがあつ

たせいか、一二年ぶりの派遣も悪くないなと思いました。

帰国際に、口頭発表する機会を頂戴しました。三月一日、省考古院主催の『陝西考古講堂』で「日本国宝平城薬師寺東塔考古発掘成果」という題目でお話しました。当日来訪された石橋茂登さんと栗山雅夫さん（ともに奈良文化財研究所）も講演され、思いがけないコラボとなりました。通訳はかつて樞考研で研修されたことのある譚青枝さん（省考古院）と中国仏教美術研究で著名な岡田健さん（東京文化財研究所）でした。お二人の語学水準の高さに助けられ、ご参会の皆さんとの質疑応答も意義あるものとなりました。

実は一週間前の三月七日にも、河南省洛陽市所在の龍門石窟研究院（以下龍門院）で口頭発表しています。社科院をはじめとする方々の要望にお応えして、薬師寺だけでなく唐招提寺についても調査研究の成果を紹介しました。ここでも質疑応答は真剣で、銭国祥さんほかの方々から様々なご意見を頂戴し、多くを学ぶことができました。このように貴重な相互交流の場が得られたことは、この研修における重要な成果の一つと言えます。また、少しは奈良県のアピールにもなったのではないでしょ

うか。それぞれの発表で準備の労をとられた路智勇さん(省考古院)、韓建華さん(社科院)、路偉さん(龍門院)、趙虎龍さん(洛陽龍門石窟国際旅行社)ほかの皆様感謝したいと思います。

二日後に帰国がせまった三月十四日、前々から気になっていた発掘調査現場の見学がようやくかきました。西北大の冉先生が西安市東郊の幸福中路で手がけられた高樓村唐墓の調査です。商業関連施設の建設に伴う事前調査で、九世紀代の墳墓が中心でした。先生は広い調査区を歩き回り、学生や作業員に対してテキパキと指示を出しつつ、遺構検出から写真撮影までご自身でこなされ、とても忙しそうでした。また、二度の爆雪に見舞われた長期の発掘で、心身ともに疲労のピークにありながらも親切に案内して下さった学生の方々の活躍も印象深い思い出です。

三、おわりに

派遣された者は帰国後に県の国際交流事業への協力が求められます。私は平成三〇年八月二五日に、県文化会館で「奈良の中の中国文化について」というお話をさせて頂きました。これは「奈良県友好交流を担う次世代養成事業」で中国に派遣され

る青年たちの事前研修の一環です。ブリーフィングのあとの休憩時間に、自発的に質問や交流活動の相談に来られた研修生がいました。奈良県にもこんなに国際交流に積極的な次世代が育っているのかと、こちらが元気をもらいました。

私自身は、今後も中国の研究者に学びながら少しずつ研究を深めてゆきたいと思います。また、できることがあれば、日中の交流に貢献したいと思います。紙幅に限りがあり、一人ひとりのお名前をあげられませんが、研修中に西北大学文化遺産学院、陝西省考古研究院をはじめ中国の方々には様々な場面でお世話になりました。また、奈良県国際課や檀考研の方々には、日本からご支援を頂きました。これらのお力添えがなくては、中国で十分に活動することはできなかったでしょう。末筆ながら深く感謝申し上げます。



研究所・附属博物館
関連展示案内

日本書紀成立一三〇〇年特別展

『出雲と大和』

主催・東京国立博物館、島根県、奈

良県、NHK、NHKプロモーション、読売新聞社

開催期間・令和二年一月一五日(水)

三月八日(日)

開催場所・東京国立博物館平成館

附属博物館・(公財)桜井市文化財協会共同企画

『王権の地、桜井』

開催期間・令和元年一〇月五日(土)

一二月八日(日)

開催場所・桜井市立埋蔵文化財センター展示収蔵室

附属博物館蔵品巡回特別展

『ししまの 大和へ』

—東アジア文華往来—

主催・附属博物館、古代オリエント博物館、東京新聞

開催期間・令和元年一〇月五日(土)

一二月一日(日)

開催場所・古代オリエント博物館展示室

*次年度以降の巡回館

横浜ユーラシア館(令和二年四月二

一日(火) 七月五日(日)

九州国立博物館(令和二年七月二八

日(火) 一二月三日(水) 予定

島根県立古代出雲歴史博物館(令和三年三月一九日(金) 五月一七日(月))

海外交流

◇日本学術振興会外国人研究者招聘事業

受入研究員・ジェームズ・スコット・ライオンズ氏(米国カリフォルニア

大学バークレー校)

期間・令和元年六月一八日〜八月一

九日

◇中国寧夏文物考古研究所研究員受

入事業

受入研究員・郭家龍氏

期間・令和元年九月一七日〜令和二

年七月一七日

◇中国西北大学文化遺産学院研究員

受入事業

受入研究員・苗凌毅氏

期間・令和元年一〇月一五日〜令和

二年一月一日

◇奈良県・陝西省戦略的専門分野交

流事業(国際課事業)

派遣職員・鈴木一議所員

派遣先・中国陝西省西北大学文化遺

産学院・陝西省考古研究院

期間・令和元年一〇月八日〜令和二

年三月一八日